

研究室の中の留学生

理学系研究科地球惑星科学専攻 博士課程1年 袁 潮霞さん (中国) / 指導教員 山形 俊男 教授

今号からの新しい企画として、研究室の中での留学生の様子を紹介するコーナーを始めます。第1回目は、2005年10月に来日し、集中コースで日本語を勉強した後、現在精力的に研究活動を行っている、理学系研究科地球惑星科学専攻の博士課程1年袁潮霞さんと、その指導教員の山形俊男教授に、お話をうかがいました。

袁 潮霞 (ユアン) さん

【留学のきっかけ】

中国の南京大学大気科学系の修士時代に、山形先生の「インド洋のエルニーニョ現象」に関する論文を読んで深い関心を持ったのがきっかけで、ぜひ山形先生のもとで研究がしたいと思い、2005年に念願かなって大学推薦の国費留学生として来日しました。

【来日後の生活】 当初は日本語がまったくわからず、留学生センターの集中コースのクラス1（初級）で3か月半日本語を勉強しました。その後、修士課程に入り、2008年春に「チベット高原の初冬の積雪面積変動にダイポールモード現象とエルニーニョ現象が及ぼす影響」というタイトルで修士論文を提出、現在、博士課程1年に在籍中です。

【研究生活と日本語】

先生とのコミュニケーションは主に英語ですが、やはり研究室の友だちは日本語を使うほうが多いです。メールで送られてくる情報にアクセスしたり、日本語での授業に参加して議論したりするためにも、日本語は役に立つので、来日直後の一定期間を集中的な日本語の学習に割いたことは意味があったと思っています。

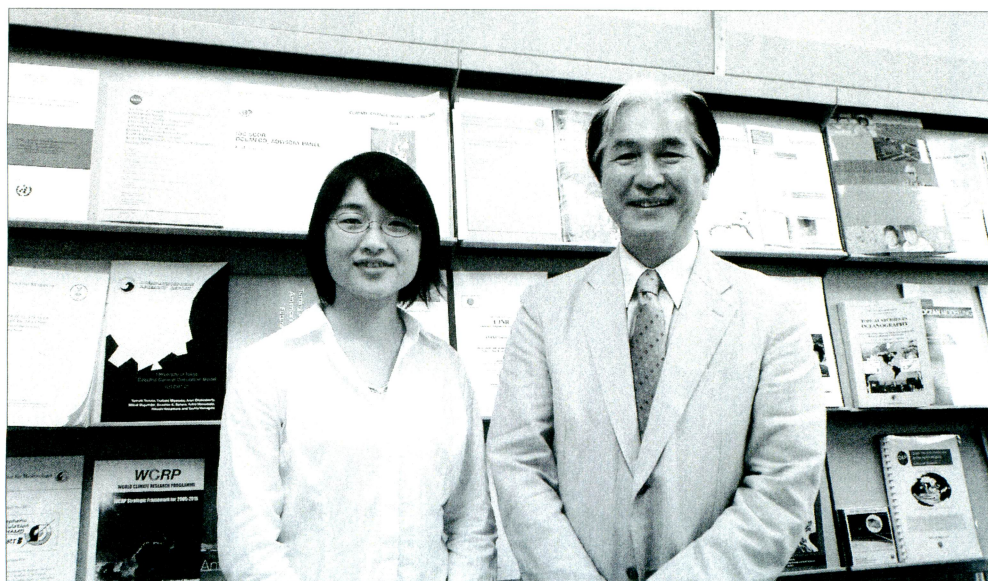
山形 俊男 教授

【研究生活における留学生】

現在、直接指導している留学生はユアンさん1人ですが、理学系全体では大勢の留学生がいます。日本人学生が自分の専攻の垣根をなかなか超えようとしないうちで、理学系の中で自由に交流する留学生の存在には積極的な意味があると思います。たとえば、ユアンさんが同じ専攻の日本人学生と話しているときに、他の専攻の留学生がやってくる。そこで知り合ったことがきっかけとなって、今度はユアンさんのいないところでも交流が生まれる——このように留学生が果たしてくれる研究環境における「触媒作用」をもっと重視したらよいと思います。留学生は、バックアップ対象としてのみ存在しているわけではないのです。

【留学生の指導教員として】

留学生を今預かって育てているというだけでなく、彼らがやがて国に帰って指導者となり、その教え子同士が国を超えて学术交流するようになる未来の大切さを感じています。その交友関係がそれぞれの孫子の代まで続いていくことは本当に素晴らしいことです。フォンノイマンが設計した米国の研究機関で若い頃に受け継いだ、そんなスピリットをユアンさんをはじめいろんな人に伝えていくことを誇りに思っています。



研究室にて (ユアンさん (左) と山形教授 (右))